

合気道小話「西郷四郎と合気道」

講道館柔道を興した、嘉納治五郎の物語を読んだ。

治五郎は東京高等師範学校（現、筑波大学）の校長時代、ややもすれば軽視されがちであった古武術を万人向きに体系化、スポーツ化して講道館柔道をつくりあげた。

これをみるといかにも古武道を排斥したように感じるが、決してそうではなく、彼は古武道を深く愛し、ついには植芝盛平を尋ね、合気道の説明を聞き、演武を見学し「これこそ私が理想とした武道である」と感嘆したという。

時に昭和5年10月のことであった。

そして門人の武田二郎と望月稔の二名を選び「お前たちは礼を尽くして習ってこい。それが日本の古武道を後世に伝える一助になるのだ」と言って植芝道場に派遣した。

これは有名な話なので、ご存知の方も多いと思うが、当時の治五郎から植芝先生に送られた書簡が今でもちゃんと植芝家に保存されている。

さて、私たちが教えを受けている養神館合気道は、塩田剛三先生によって興された訳であるが、その師は植芝盛平先生であり、更には武田惣角先生となるが、これには興味ある話が残っている。

幕末期の会津藩家老職だった西郷頼母近さいごうたのもちかのり恵が、当時の大東流合気柔術の継承者であった。勿論この武術はその昔、新羅三郎義光によって創始され、以後長い歴史の中で諸流派の良いところを取り入れ、合流して練り上げ幕末期に至って完成されたことは衆知のことだが、近恵は達人の域に達していた。

一説によれば...近恵は講道館柔道で修業に励んでいた、ある青年の非凡な才能に目をつけ、この青年を養子に迎え入れ、西郷四郎とした。

そして養子となった四郎に大東流合気柔術を伝えようとした形跡がある。

四郎得意の“山嵐”の大技も、大東流の技だと言う人もいるくらいだ。

だがしかし、近恵のこの期待は実らなかった。

なぜなら四郎はその頃の中国大陸に志を抱き、日本から遠く離れて行ってしまったのだ。近恵は四郎のとった行動に愕然としたことだろう。

そこで傷心の彼は、門弟のひとりである武田惣角に奥義の一切を伝授したというのである。

やがて時がたち、帰国した西郷四郎は養父近恵の死を、遠く長崎の地で電報で知らされ、急いで駆けつけたときには、すでに葬儀は終わっており、四郎は墓前で号泣したという。